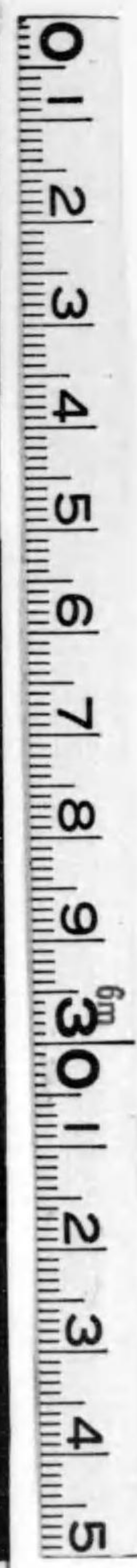


14.21
289

大正七年
六月
大正六年度業務報告



始



1421
289

大正七年六月

大正六年度業務報告

富山縣立農事試驗場

1421-289



大正六年度業務報告目次

一、稻作ノ部

- 第一、品種比較試驗
- 第二、品種比較豫備試驗
- 第三、豊凶考照試驗
- 第四、移植株數對施肥量試驗
- 第五、深耕對施肥量試驗
- 第六、種子優劣比較試驗
- 第七、苗代灌水深淺試驗
- 第八、施肥法試驗
- 第九、窒素質肥料比較試驗
- 第十、稻移植期試驗
- 第十一、窒素用量試驗
- 第十二、磷酸用量試驗

大正
7.7.2
内交

第十三、加里用量試驗
第十四、水稻品種改良

二、麥作ノ部

第一、品種比較試驗
第二、大麥播種期試驗
第三、播種法試驗
第四、耕作法對照試驗

三、藺草作ノ部

第一、窒素用量試驗

四、蔬菜ノ部

第一、輪作試驗

五、除害ノ部

第一、稻熱病ト肥料三要素トノ關係試驗
第二、醱酵性肥料ト稻熱病トノ關係

第三、桃縮葉病豫防試驗

第四、桃炭疽病豫防試驗

第五、胡瓜露菌病豫防試驗

第六、稻莖萎除試驗

第七、二化螟虫湛水驅除試驗

第八、石油被害試驗

第九、豌豆象虫驅除試驗

第十、葱薊馬虫驅除試驗

第十一、瓜守驅除試驗

六、農藝化學ノ部

七、調 査

第一、稻裏作經濟調査

第二、二化螟虫發生時期調査

第三、二化螟虫加害時期調査

第四、二化螟虫越冬狀況調査

第五、二化螟虫移動狀況調査
第六、二化螟虫ニ對スル以掻調査
八、事務ノ部

- 第一、出張
- 第二、文書發收件數
- 第三、出版物發行
- 第四、參觀人
- 第五、配付
- 第六、質問應答
- 第七、証明及鑑定
- 第八、練習生養成
- 第九、經費

大正六年度業務報告

試驗

一、稻作ノ部

第一 品種比較試驗

本試驗ハ本縣ノ風土ニ適スル優良品種ヲ見出サントスルモノニシテ十四種ニツキ試驗ノ結果成績良好ナリシモノ左ノ如シ

大場ト熟期略同ニシテ大場ヨリ收量多カリシモノ

變二十四號(玄米反當收量二石六斗八升五合)豊國(二石六斗四升)大場(二石四斗六升九合)

石白ト熟期略同ニシテ成績良好ナリシモノ

幾内早生六十一號(二石九斗五升八合)變二〇號(二石七斗九升六合)石白(二石六斗七升三合)

第二 品種比較豫備試驗

本試驗ハ前項品種比較試驗ニ供用スルニ先チ豫メ其品種ノ優劣ヲ識別シ良好ナルモノ、ミヲ撰拔セシメガ爲メニ行フモノニシテ二十五種ニツキテ試驗ノ結果早生種トシテ早生愛國、中生種トシテ

ハ早石白・幾内早生二十二號等良好ナル成績ヲ示セリ

第三 豊凶考照試験

本試験ハ毎年同一ノ地ニ同一ノ稻種ヲ同様ナル耕種法ニテ栽培シ一定ノ時期ニ於テ其ノ生育狀況ヲ調査シ既往ノ成績ト對照シ其年ニ於ケル豊凶豫知ノ資料トナサントスルモノニシテ數回其生育狀況ヲ發表セリ今一反歩當收量ヲ既往ノ成績ト比較スレハ次ノ如シ

	大正六年	前二年平均	比較増減
早稻二種平均	二三四八	二六三五	△
中稻二種平均	二八三四	三、〇〇三	△
晚稻二種平均	三、〇二二	三、三三四	△

△印ハ減ヲ示ス

第四 移植株數對施肥量試験

本試験ハ稻苗移植株數ニ伴フ施肥量ノ差異ガ稻ノ生育收量ニ及ボス影響ヲ知ラントスルモノニシテ一坪株數四十八株六十六株八十株ノ三種トナシ肥料ハ堆肥大豆粕硫酸アンモニア過磷酸石灰灰ヲ用ヒ窒素全量ヲ二貫五百匁三貫匁三貫五百匁ノ三種トナシテ試験シタル結果株數ニ對シテハ六十六株植收量最モ多ク施肥量ハ三貫匁ノモノ玄米收量多キヲ示セリ

第五 深耕對施肥量試験

本試験ハ耕鋤ノ深サト施肥量トノ差ノ稻ノ生育收量ニ及ボス影響ヲ知ラントスルモノニシテ耕鋤ノ深サハ四寸五寸六寸ノ三種トナシ肥料ハ前項試験ト同ジク三種トシテ試験シタル結果深耕トナルニ從ヒテ玄米收量ヲ増加シ耕鋤ノ深サ同一ナル時ハ肥料ヲ増スニ從ヒテ玄米收量ヲ増加セリ

第六 種子優劣比較試験

本試験ハ稻種子ノ產地トシテ知ラレタル東礪波郡青島村及種田村ニ生産セシ種子ト當場ニテ生産シタル種子トノ優劣ヲ比較研究セントスルモノニシテ大場石白及無芒愛國ノ三種ニツキテ何レモ原種ヲ當場ヨリ配付シタルモノヨリ採種セルモノヲ以テ試験シタルニ產地ニヨリ大差ナキヲ示セリ

第七 苗代灌水深淺試験

本試験ハ稻苗灌水ノ深サガ插秧後ノ稻ノ生育收量ニ及ボス影響ヲ知ラントスルモノニシテ本年ハ各區共ニ收量ニ著シキ差ナカリキ

第八 施肥法試験

本試験ハ同一ノ肥料ヲ施用スル場合ニ於テ施肥法ノ如何ニヨリ稻作ニ及ボス影響ヲ知ラントスル

モノニシテ本年施行シタル各種施肥法ハ收量ニ大差ナカリキ

第九 窒素質肥料比較試験

本試験ハ諸種窒素質肥料ノ肥効ヲ知ラントスルモノニシテ人糞尿酸アンモニア紫雲英胴鯨笹目鯨粕大豆粕ニツキテ試験シタルニ笹目、胴鯨等玄米收量多キヲ示セリ

第十 稻移植期試験

本試験ハ苗ノ生育状態ニ伴フ移植ノ適期ヲ知ラントスルモノニシテ五月二十四日五月三十一日六月七日六月十二日六月二十日ノ四期ニ分テ移植シタルニ五月三十一日植玄米收量最も多ク六月十二日植六月二十日植順次之ニ次ゲリ

第十一 窒素用量試験

本試験ハ窒素ノ適量ヲ知ラントスルモノニシテ無窒素窒素一貫匁一貫五百匁二貫匁二貫五百匁三貫匁ノ六區ニ分テ試験シタルニ窒素一貫五百匁區最も良好ナル成績ヲ示セリ

第十二 磷酸用量試験

本試験ハ磷酸ノ適量ヲ知ラントスルモノニシテ無磷酸磷酸一貫匁一貫五百匁二貫匁二貫五百匁三貫匁ノ六區ニ分テ試験シタルニ各區ニ著シキ差ヲ認めズ

第十三 加里用量試験

本試験ハ加里ノ適量ヲ知ラントスルモノニシテ無加里加里一貫匁二貫匁三貫匁ノ四區ヲ設ケテ試験シタルニ無加里區ヲ除キタル他ノ三區ニハ著シキ差異ヲ示サザリキ

第十四 水稻品種改良

純系淘汰法ニヨリテ在來種ヨリ優良ナル純系ヲ撰出セントスルモノナリ

純系淘汰第一年目

品種石白、縣下四十四ヶ所ヨリ該品種ヲ蒐集シ栽培調査ノ結果明年度其ノ純否鑑定ニ供用セントスルモノ二百八十四株ヲ撰拔セリ

純系淘汰第二年目

品種大場

前年撰出セル三百九十一株ニツキテ調査ノ結果明年度生産力比較試験ニ供用セントスルモノ三十六系ヲ撰拔セリ

二、麥ノ部

第一 品種比較試験

本試験ハ本縣ニ適スル大麥ノ優良品種ヲ見出サントスルモノニシテ十三種ニツキテ試験シタルニ六角シユバリ一杵築早生最モ良好ニシテ三月コレニ次ゲリ

第二 大麥播種期試験

本試験ハ麥ヲ播種スルニ際リ其適期ヲ知ラントスルモノニシテ十月中旬全下旬十一月上旬ノ三區トナシテ試験シタルニ播種期遅ル、ニ從ヒテ收量ヲ減セリ

第三 播種法試験

本試験ハ大麥ヲ播種スルニ當リ其方法ノ適當ナルモノヲ知ラントスルモノニシテ撒播点播二條播算盤播ノ四種ニツキテ試験シタルニ撒播區ノ收量最モ多キヲ示セリ

第四 耕作法對照試験

本試験ハ普通農家ノ行フ如キ粗放ナル栽培法ト栽培法ニ少シク改良ヲ加ヘタルモノトガ其ノ收穫ニ如何ナル影響アルヤヲ知ラントスルモノニシテ本年ノ成績ハ後者ハ一割八分余ノ增收ヲ示セリ

三、藎草作ノ部

第一 窒素用量試験

藎草ニ對スル窒素肥料ノ適量ヲ知ラントスルモノニシテ窒素十貫匁十二貫匁十四貫匁ノ三區ヲ設

試験シタル結果窒素十二貫匁區最モ良好ナル成績ヲ示セリ

四、蔬菜ノ部

第一 輪作試験

試験地ヲ拾區ニ分テ各區ヲ六十步宛トシ二作若クハ三作ノ蔬菜ヲ栽培シ以テ優良ナル經濟的輪作法ヲ知ラントスルニアリ而シテ本試験ハ大正五年度ヨリ四ケ年ノ繼續試験ニシテ本年ハ其第二年目ニ當レリ其試験區別ハ左ノ如シ

區別	大正五年度 (前年度)	大正六年度 (本年度)
第一區	甘藍 葱	西瓜 瓜
第二區	夏大豆 菜菔	胡瓜 瓜
第三區	麥 葱	越瓜 瓜
第四區	夏豆 葱	白菜 瓜
第五區	夏瓜 葱	茄 菜
第六區	越瓜 葱	蘿蔔 菜
第七區	南瓜 葱	馬鈴薯 菜
第八區	麥 葱	夏大根 菜
第九區	夏大根 葱	夏大根 菜
第十區	馬鈴薯 葱	早生蘿蔔 菜

右本年度試験ノ成績ヲ調査スルニ第五區收益最モ多ク第九區第二區第六區第三區第七區第十區第八區第四區順次之ニ次キ第一區ハ最モ劣レリ

五、除害ノ部

第一 稻熱病ト肥料三要素トノ關係試驗

本試験ハ肥料三要素ノ割合ガ稻熱病發生ト如何ナル關係アルヤヲ知ラントスルモノニシテ標準(肥料三要素反當用量窒素二貫匁磷酸一貫八百匁加里一貫六百匁ノ割合ニ硫酸アンモニア過磷酸石灰木灰ヲ使用)無肥料、無窒素、無磷酸、無加里、窒素倍量、窒素三倍量、磷酸倍量、磷酸三倍量、加里倍量、加里三倍量ノ十一區ニツキ試驗シタルニ窒素用量多キ場合、加里不足ノ場合ハ共ニ病、虫ノ被害ヲ多カラシメタリ而シテ收量ニ於テハ標準區二石四斗九升九合九勺加里三倍量區二石六斗七升九合九勺、窒素三倍量區二石六斗一升九合九勺ニシテ其他ノ區ニアリテハ大差ナカリキ

第二 醱酵性肥料ト稻熱病トノ關係

本試験ハ紫雲英、大豆粕ノ如キ醱酵性肥料ヲ施用スル時ハ稻熱病發生ト如何ナル關係アルヤヲ知ラントスルモノニシテ肥料三要素反當用量窒素四貫匁、磷酸二貫匁、加里二貫三百匁トシ次ノ區別ニヨリ試驗シタルニ醱酵性肥料ノ施用多キ時ハ病、虫ノ被害ヲ誘致シ易キカ如シテ收量

於テハ第四區最モ多ク第五區之レニ次ギ其他ノ區ニ於テハ大差ナカリキ

區名	試驗別	肥料名及反當用量			
		紫雲英	大豆粕	骨粉	硫酸アンモニア
一區	醱酵性肥料 其一	300,000	300,000	6,000	1,500
二區	全 上 其二	400,000	110,000	6,500	2,500
三區	全 上 其三	500,000	150,000	7,500	1,800
四區	全 上 其四	600,000	70,000	7,000	2,100
五區	非醱酵性肥料	300,000	100,000	2,000	7,500
		堆肥	鯨粕	骨粉	硫酸アンモニア
		300,000	100,000	2,000	7,500
					木灰
					6,838

第三 桃縮葉病豫防試驗

本試験ハ桃縮葉病豫防上藥劑ノ種類並ニ撒布時期ヲ知ラントスルモノニシテ三斗式石灰ボルドウ液及五十倍酸曹液ノ二種ヲ以テ發芽前發芽時ノ二期ニ區別シ試驗シタルニ無豫防區及ボルドウ液撒布區ハ發病シタルモ酸曹液撒布區ハ何レモ發病ヲ認メザリキ

第四 桃炭疽病豫防試驗

本試験ハ桃炭疽病豫防上藥劑ノ種類並ニ撒布時期ヲ知ラントスルモノニシテ、アムスデンジュン種ニツキ石灰ボルドウ液(開花前、落花後二斗式果實豆大ノ時過三斗式、果實指頭大ノ時過六斗

式撒布)及酸曹液(開花前、落花後、果實豆大ノ時五十倍、果實指頭大ノ時八十倍液撒布)ノ二種ヲ以テ開花前ヨリ果實指頭大迄四回、落花後ヨリ果實指頭大迄三回、果實豆大及指頭大ノ時二回、無豫防ノ七區ヲ設ケ試驗シタルニ各區共多少發病シ成績顯著ナラサリシモボルドウ液撒布區(開花前ヨリ果實指頭大迄四回、落花後ヨリ果實指頭大迄三回撒布)ハ發病果少ナク其他ノ區ニ於テハ發病果多キヲ見タリ

第五 胡瓜露菌病豫防試驗

本試驗ハ胡瓜露菌病豫防上藥劑撒布回数及時期ト發病トノ關係ヲ知ラントスルモノニシテ三斗式石灰ボルドウ液ヲ一回(七月五日)二回(六月十一日、廿八日)三回(六月十一日、二十八日、七月五日)四回(六月十一日、二十一日、二十八日、七月五日)五回(六月十一日、二十一日、二十八日、七月五日、十三日)無豫防ノ六區ニツキ試驗シタルニ一回撒布區及無豫防區ハ六月二十日頃ヨリ發病セルモ其他ノ區ニ於テハ發病ヲ見サリキ

第六 稻莖芟除試驗

本試驗ハ二化螟虫第一化期ノ喰害ヲ受ケタル場合ニ於テ之レカ驅除トシテ稻莖ヲ下部ヨリ芟除スル時ハ稻生育並ニ收量ニ及ホス關係ヲ知ラントスルモノニシテ稻ヲ六月四日插秧シ五日目、十日目、十五日目、二十日目芟除及標準ノ五區ニツキ試驗シタルニ插秧後五日目及十日目芟除區ハ收量

ニ大ナル影響ナカリシモ其他ノ區ニ於テハ著ルシキ差異ヲ來セリ

第七 二化螟虫潜水驅除試驗

本試驗ハ二化螟虫第一化期ノ被害期ニ於テ潜水ニヨリ驅除シ得ルヤ否ヤヲ知ラントスルモノニシテ潜水時間一晝夜、一晝夜半、二晝夜、三晝夜、四晝夜、五晝夜間トナシ試驗シタルニ潜水一晝夜間ニテハ死セル虫ヲ發見セズ潜水時間ヲ延長スルニ從ヒテ死虫數ヲ增加スルモ未ダ完全ニ驅除スルコト能ハサリキ

第八 石油被害試驗

本試驗ハ稻田ニ石油ヲ灌注シ其用量ノ多少及放置時間ノ長短ハ稻生育收量ニ如何ナル影響ヲ及ホスモノナルヤヲ知ラントスルモノニシテ石油用量反當三升、二升五合、二升ノ三種トシ注油回数ヲ一、二、三、四、七回放置時間ヲ三時間、五時間ノ二種トシ試驗シタルニ稻ノ生育收量上何等ノ影響ヲ認メサリキ

第九 豌豆象虫驅除試驗

本試驗ハ豌豆象虫ガ被害種實中ヨリ脱出セサル幼虫期ニ於ケル適當ナル驅除法ヲ知ラントスルモノニシテ湯浸漬華氏百二十度、百三十度、百四十度、百五十度ノ四種、二硫化炭素燻蒸三、四、五磅ヲ以テ一晝夜、二晝夜間、標準ノ十一區ニツキ試驗シタルニ温湯漬ノ四區及二硫化炭素三磅燻蒸ノ二

區ハ共ニ効力少ナカリシモ二硫化炭素四磅ヲ以テ一晝夜間燻蒸セハ完全ニ驅除スルコトヲ得而シテ燻蒸スルモ發芽ニ影響セサルモノ、如シ

第十 葱薊馬虫驅除試驗

本試驗ハ葱薊馬虫ノ驅除上有効ナル藥劑ヲ知ラントスルモノニシテ石鹼液（水一升ニツキ石鹼二匁、三匁）除虫菊加用石鹼合劑（水一升ニツキ石鹼二匁及除虫菊一匁、二匁）石油乳劑（三十倍、四十倍）除虫菊加用石油乳劑（四十倍、五十倍）ノ八種ニツキ試驗シタルニ石鹼液二種共効力薄弱除虫菊加用石鹼合劑稍有効ニシテ石油乳劑及除虫菊加用石油乳劑ハ効力最モ大ナリキ

第十一 瓜守驅除試驗

本試驗ハ瓜守驅除ニ有効ナル藥劑ヲ知ラントスルモノニシテ除虫菊浸出液（水一升ニツキ除虫菊二匁、三匁、四匁）除虫菊加用石鹼合劑（水一升ニツキ石鹼二匁及除虫菊二匁、三匁、四匁）亞硫酸ソーダ加用ボルドウ液、バリスグリーン加用ボルドウ液ノ八種ニツキ試驗シタルニ最モ有効ナリシハ後ノ二種ナリシモ作物ニ藥害ヲ認メタリ

六、農藝化學ノ部

本年度内ニ於ケル分析点數ハ依頼分析中肥料二百十点此ノ成分數四百三十六土壤一点成分數三、

場用分標肥料十七点此ノ成分數二十六收穫物四点成分數四トス

七、調 査

第一 稻裏作經濟調查

本調査ハ稻ノ裏作トシテ紫雲英ヲ栽培スルモノト麥ヲ作付スルトハ何レガ有利ナリヤ其經濟上ノ得失ヲ査定セントスルモノニシテ本年ノ成績左ノ如シ

第一區 紫雲英稻ノ輪作	第二區 麥稻紫雲英ノ輪作	第三區 麥稻ノ輪作	反 當		收 量	
			紫雲英	麥	玄 米	米
六、四、五〇〇	一	二、九七〇	三、〇七〇	一	二、一七八	二、一七八
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一

第二 二化螟虫發生時期調査

本調査ハ二化螟虫發生時期ヲ知ランガ爲メ第一回發蛾初期ヨリ第二回發蛾終期ニ至ル迄ヲ圃場ニ豫察燈ヲ點火シ誘殺セシ蛾數ヲ調査セルモノニシテ其成績次ノ如シ

化蛾期別	發生期別	大正六年	大正五年	大正四年	大正三年	大正二年	大正元年	明治四十一年	明治四十一年
發蛾初期	五月二七日	五月二四日	五月二七日	五月二二日	五月二二日	五月二二日	五月二六日	五月二〇日	五月二七日
最盛期	六月八日	六月四日	六月七日	五月二五日	六月五日	六月四日	五月二九日	六月一〇日	六月一〇日

第二化期	最終期	
	發蛾初期	最盛期
九、二	七、二五	六、三〇
九、八	七、二七	六、一九
九、二	七、二九	七、二
九、〇	八、二	六、二五
九、七	八、五	七、二
九、〇	八、一	六、三〇
九、一五	八、八	七、一〇
九、一五	八、三	七、二五

第三 二化螟虫加害時期調査

本調査ハ二化螟虫驅除豫防上稻被害莖切取ノ適期ヲ知ランガ爲メ稻插秧ヨリ收穫迄五日毎ニ被害莖ヲ切取リ莖中存在虫數ヲ調査シタルニ第一化期ハ六月下旬乃至七月上旬第二化期ハ八月上旬ハ一莖中ニアル虫數最モ多數ナリキ

第四 二化螟虫越冬狀況調査

本調査ハ二化螟虫越冬狀況ヲ知ランカ爲メ稻刈取後莖及株中ニアル虫數ヲ調査シタルニ五歩ノ面積ニ於ケル莖三千七百六十五本中ニ五頭二百十株中ニ一五頭ノ越冬幼虫ヲ見タリ

第五 二化螟虫移動狀況調査

本調査ハ二化螟虫驅除豫防上莖處分ニ資センカ爲メ越冬幼虫ノ移動狀況ヲ知ラントスルモノニシテ三月上、中、四月上、下、五月中旬ニ莖中ノ幼虫ノ位置ヲ調査シタルニ三月上旬乃至四月上旬

迄ハ莖刈口ヨリ一尺以上ノ位置ニ蟄伏虫ヲ見タルモ羽化期ニ近ツクニ從ヒ漸次刈口ニ下リ五月中旬ニ至レハ五寸以内ノ位置ニ虫數最モ多カリキ

第六 二化螟虫ニ對スル以掻調査

本調査ハ莖以中ニ越冬スル二化螟虫ノ蛹化期ニ際シ小熊手ヲ以テ以掻ヲ行ヒ採集セル螟虫數ヲ調査セルモノニシテ約四百束ノ以ヨリ四月十九日ヨリ六月四日迄採取リタル螟虫數九百九十二頭ニ達セリ

八、事務ノ部

第一 出張

御用柄	管回		管外		管延		管内		管外	
	日	數	日	數	日	數	日	數	日	數
農事講習講話	七	三					一	三		
實地指導	二	八					五	〇		
品評會審査	三	四					八	六		
農事調査	一	二					一	九		
農事視察	三	三					三	六		
試驗事務打合	五	五					三	九		
依託試驗地監督	二	四					三	九		

諸會合ニ列席	三六	一	一六	一
研究材料採集	二	一	三	一
肥料共同購入立會	二	一	五	一
養鷄講習會出席	二	一	三	一
園藝講習會出席	二	一	三	一
病虫害同上	二	一	三	一
計	二二〇	五	三三	一〇九

第二 文書發受件數

收受文書 千百三十六件
發送文書 千二百六十二件

第三 出版物發行

大正五年度業務報告 六百部
農事試驗場稻作一覽 千五百部
稻種改良事業 二百部

第四 參觀人

普通參觀者 三千四百五十三人

生徒參觀者 二千五十六人

第五 配付

一、出版物

大正五年度業務報告 五九八部
害虫驅除豫防一覽表 一五五
稻種改良事業 一六二
農事試驗場一覽 九二三

二、種 苗

種 粃 (原種) 三石二斗八升四合五勺 無價
麥類種子 三石二斗三升
苜蓿種子 三石五斗三升
蔬菜種子 一斗八升
同 苗 六千本
花卉種子 四百袋

三、種禽種卵

種 種 一八九羽
 種 卵 八二七個
 四、野鼠チブス菌 三、五八〇町步分

第六 質問 應答

文書ヲ以テ質問ニ應答シタルモノ左ノ如シ

家禽ニ關スル件 三 件
 普通農事ニ關スル件 五 件
 病虫害ニ關スル件 四 件
 肥料ニ關スル件 四 件

第七 証明及鑑定

農具鑑定 一 件
 農具証明 一 件

第八 練習生養成

上新川郡新保村栗山 高見周治

水見郡窪村柳田 作田喜一
 上新川郡熊野村經力 清水正朔

第九 經費

經費豫算左ノ如シ

經常經 一、二、五九二、〇〇〇

內 譯

俸給 三、八二九、六三〇
 雜給 二、六三七、五四〇
 場費 三、七五三、〇〇〇
 修繕費 三四七、〇〇〇
 米麥原種圃費 一、四六七、一六〇
 米麥採種圃及種子配付監督費 五五七、六七〇

1424
289

大正七年六月二十三日印刷
大正七年六月二十五日發行

(非賣品)

富山縣立農事試驗場

富山縣富山市二番町五番地

會社 高島商會

印刷者 代表社員 清水宗三郎

富山縣富山市二番町五番地

印刷所 會社 高島商會

電話二一九番

1421
289

8.4.15

終

